

☆コロナの感染は収まるどころか拡がるばかり、9月例会は残念ながら休止とします。

☆10月以降はスケジュールを見直し、推移を見ながら判断して行きます。

現時点でのスケジュール（案）は、

10月 明神山に登る（奈良） 11月 服部緑地（大阪） 12月 納会は休止  
1月 白毫寺（奈良） 2月 浪花文学散歩（大阪） 3月 京都花街続編（京都）

いずれも、下見済みで実施出来ていない所、参加のための移動が少ない所です。

京都トレイルは、再開直後にはいささかハードなので先延ばしします。

ワクチン接種は多くの方がお済みですが、体力・脚力の維持にご留意下さい。

☆燦歩会9月のアルバムから （500回の軌跡の中から随時掲載します）



2016年 和歌山・友ヶ島



2017年 奈良・斑鳩 法起寺



2018年 兵庫・六甲山 森林植物園



2019年  
長野・美ヶ原



2020年 大阪 防災体験ツアー

☆毎月第4日曜日開催です。(再開待ちです)

旧友会員の方、職員の方、御参加をお待ちします。

連絡先 山村恵一 090-1484-4403、y-yamamura@ares.eonet.ne.jp

☆蛇足の燦歩 音如ヶ谷（おんじょがたに）界隈

いつも燦歩会のレポートの末尾に、書かずもがなの「蛇足」を書いている者です。毎月の燦歩会もままならず、再開を信じて日々の散歩で備えるばかりですが、その中で折々目に触れた事を記します。題して「蛇足の燦歩」です。

音如ヶ谷は私の住处から歩いて10分ほどの所にある小さな公園です。前回ご紹介した京都府木津川市相楽台（さがなかだい）の団地の中にあつて、一部は奈良市に接しています。とんぼを「オンジョ」と呼ぶ地域もありますが、あるいはとんぼの群れ飛ぶ谷だったのでしょうか？（全くの想像です）今回のみにミニ燦歩はこの音如ヶ谷界隈です。移動距離はほとんどありませんが、弥生時代から古墳時代、奈良時代と時代順に歩いてみます。



この谷から3筋程登った所、住宅前の道路に手のひら大の標識が埋め込まれています。

「相楽山（そうらくやま）銅鐸出土地」です。1982（昭和57）年6月12日、住宅地開発の工事の中で、銅鐸が発見されたのです。高さ40cmを超える立派な銅鐸です。お坊さんの袈裟の様な縦横の縞文様が見えます。



銅鐸の発見には、こんなエピソードが残されています。この年12月に発行された「京都府埋蔵文化財情報」に記されている「本当の話」です。拾い読みしてみます。

「…京都府と奈良県との府県境付近の通称平城山（ならやま）丘陵の一面から、袈裟襷文銅鐸（けさだすきもんどうたく）1個が発見された。

……午後3時半頃、樹木伐採・抜根作業中、ユンボで直径20cm前後のナラの木のを

掘り起こした時、木の根とともに地上に放り出された。

……はじめに通報を受けた奈良市文化財課長田辺征夫氏の実査によって、出土地点が京都府に属していることが確認され、急遽、木津町教育委員会が主体となって発掘調査を実施することとなった。…」

府県境の所に思いがけず出て来た銅鐸、当時の混乱ぶりが偲ばれます。

この辺りは一面の山地、奈良なのか？ 京都なのか？ 分かりにくかったのでしょう。

ちなみに、文中に登場する田辺征夫さんは、後に奈良国立文化財研究所長も務める事になる考古学者です。

ここに銅鐸を埋めて祀ったのは誰なのでしょう？ 丘の下の平地には弥生時代中期の住居や墓の跡があり、そこの人々が埋納したものと考えられています。

さて銅鐸から時代が下って、今度は古墳です。

音如ヶ谷から見上げた写真の木々の右端の方に、長さ22m程の「帆立貝形前方後円墳」が確認されています。（奈良文化財研究所の報告では「音乗谷」と表記されています。）



高さ60cm程の立派な馬形の埴輪なども発掘

されていて、6世紀前半の古墳と考えられています。ただ墳丘はかなり崩れているようで、藪の中に入ってみても、私にはなんとも分かりませんでした。

この地域の周辺に、銅鐸を守り伝え、古墳を築くだけの力を持つ人々が暮らしていた訳です。

もう一つ、ここには「音如ヶ谷瓦窯跡（がようあと）」があります。

平城京建設の為に屋根瓦を、粘土から成形して焼き上げ、納めていた工房と窯の跡です。

古墳のすぐ下、覆い屋の中に原寸大の瓦窯のレプリカが展示されています。



瓦作りには材料の粘土と燃料の薪が必要です。また重いものですから、出来るだけ近い所で作りたかった事でしょう。音如ヶ谷と平城京とはおよそ4km、途中に上り坂もあり、重い瓦を背負って運ぶのはさぞ大変だった事でしょう。それでもこの近隣には10を超える瓦窯跡が確認されています。平城京の建設に向けて、人々の生活も瓦作りに巻き込まれ、一斉に瓦を焼く煙がたなびいていたのでしょう。音如ヶ谷の瓦は、その文様から、光明皇后ゆかりの法華寺の創建にも使われたと確認されています。

弥生時代から奈良時代まで、音如ヶ谷のほとんど歩かないミニ燦歩でした。

生島（おじま）幸弥